Title:sinpou4722・23.ec7 Page:1 Date: 2013/05/28 Tue 14:46:01

教団新報

定 価 1部140円（本体133円〒共200円）
予約購読料 1年分 〒共 5,000円
紙代のみ 3,500円
振替 00140―9―145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX03(3207)3918
発行人 内藤留幸
編集主筆 竹澤知代志
印刷所 株式会社きかんし

教団救援対策本部正式設置、石橋本部長（中央）

第37総会期 第2回（臨時）常議員会

地域に仕える教会の再建を目指す

東日本大震災 被災支援の基本理念を立てる

12億円の海外献金プロジェクト承認

未曾有の東日本大震災を受けて、その対策を協議する第37総会期第2回（臨時）常議員会が、4月18日、教団会議室で30人中28人が出席して開催された。

石橋秀雄議長は、冒頭の議長報告の中で、「いま日本は未曾有の危機に直面している。地震発生翌日に、救援対策本部の設置を宣言し、翌々日の3月13日から16日、3月28日から31日の2回、被災教会を訪問、お見舞いした。

救援の基本的な方針として、地域に仕える教会の再建を目指す。礼拝の場、教会の再建を中心とし、教会を通しての社会的弱者、子どもと高齢者の支援に当たる。全教団的な取り組みをしたい。海外からドイツの1億円の募金申し出を始め、多くの献金が寄せられている」と報告した。

続いて救援対策委員会報告で、内藤留幸総幹事は、「昨年12月発足した救援対策基金の運用規定により、発生直後、教団救援対策委員会が設置された」こと、「救援対策基金に兵庫教区から第2次阪神淡路大震災募金の内から6,000万円、関東教区から中越沖地震募金残高700万円が繰り入れられた」と語った。

また、被災支援の基本理念として、①行政救援から漏れた人。②被災教会の再建。③孤児へのケア。④孤立者へのケア。⑤教会付属施設（保育園、幼稚園など）の再建。⑥被災者の心のケアを上げた。対策基金から3被災教区（奥羽・東北・関東）に救援資金として3,000万円を送金した。

3月22日の常任常議員会で教団救援対策本部が正式に設置され、4月4日、第1回会議が開催された。対策本部は、加藤誠幹事が担当幹事となり、藤盛勇紀総務幹事と共に事務局の中心となる。東北教区から要望のあった現地対策本部（仙台市）の設置、常駐者の派遣について、人選を進めることになった。

対策本部が発足したことにより、救援対策委員会は本部の下に入って役割を終えた。救援対策本部委員として、以下の10名が当たり、石橋秀雄議長が本部長を務めることが承認された。

石橋秀雄議長、岡本知之副議長、雲然俊美書記、長崎哲夫常議員（東京）、大村栄常議員（西東京）、藤掛順一常議員（神奈川）、北紀吉常議員（東海）、佐久間文雄常議員（関東）、稲松義人氏（日本キリスト教社会事業同盟）、田中弘志氏（宣教協力学校協議会）。

欠席の沖縄教区を除き、16教区から別掲のような被災状況、支援報告が行われた後、海外献金プロジェクト議案が上程された。議案説明に立った加藤幹事は、「災害発生後、1週間足らずの間に30近くの海外諸教会から祈り、励ましの連絡があり、『献金が寄せられているが、教団の使途が不明のため、献金を集め難く、送金し難い』との声がある」とし、被災状況の確定を待って目標が定められる国内向けの救援募金とは別に、海外向け献金大綱を急ぐ必要性を説明した。

献金目標は総額12億円で、地域復興と教会の復興に大別される。地域復興は10億円で、内訳は、①震災遺児・避難学童30名に10～15年間の奨学金2億円。キリスト教学校を通じた奨学金1億円。②養護施設の増設、里親探し組織作り2億円。③被災養護施設・保育園・幼稚園の再建2億円。④被災地の子ども・高齢者への生活支援・心のケア1.5億円。⑤教団スタッフの活動費1億円。⑥予備費0.5億円。

被災教会の再建費2億円で合計12億円となっている。

これに対し、「常任常議員会の合意である『教会を通しての支援』とプロジェクトには乖離がある」「海外だけでなく、国内の教会に呼びかけても良いのでは」対象学校・養護学校への追加要望などの意見が出たが、具体化は今後の審議に委ねるとして、12億円の海外献金プロジェクトは挙手多数で承認された。

（永井清陽報）

高台から瓦礫の原と化した石巻市街を見下ろす。手前は墓地

お知らせ
「教団新報」今号を4722・23合併号とし、次号4724号は、6月4日に発行します。
総幹事 内藤留幸

被災地に、被災地の教会に、共に熱い祈りを

《全キリスト教会の **11246 祈りの会** の呼びかけ》

東日本巨大地震と津波がもたらした大惨事と、二次災害としての福島第一原子力発電所事故は、地域を不安の中に陥れ、戦後最大の危機として日本社会を脅かしています。

大津波は1万2千を超える命を呑み込み、なお1万5千名の行方不明者がおり、言語を絶する悲惨に言葉を失っています。

一つの命にどれほどの愛する者のつながりがあったでしょうか、人のつながりがあったでしょうか。その関係が断ち切られた絶望をどれほどの人が味わっているでしょうか。

「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた十字架の主の声が心に浸みこみます。

十字架の主に慰めと希望があります。日本の諸教会が心を一つにして、共に熱い祈りを捧げる時をもちたいと強く願っています。

11246（11日 午後2時46分）、この日とこの時間を覚えて共に祈りましょう。

2011年4月5日
日本基督教団 総会議長 石橋秀雄

各教区被災状況報告

臨時常議員会の中で、各教区議長または代理者により、東日本大震災関連事項に絞って、教区報告が行われた。特に被災3教区報告には時間が割かれた。

奥羽教区邑原宗男議長は、宮古、新生釜石、千厩、大船渡の4教会の被害状況や近隣地域への救援活動を主に、詳細に報告した。宮古は教会・牧師館一階が水没したものの、盛岡YMCAやカナンの園職員により掃除がなされ、逆に近隣地区の救援基地として用いられていることが、新生釜石については、ボランティア活動によってヘドロと瓦礫に埋まった礼拝堂の片付けが行われたこと、淀川キリスト教病院から医師・看護師の応援が与えられ、地域の方々の相談に与っていること、北海教区からの応援、教団議長はじめ東京神学大学生のボランティアのことなどが詳しく述べられた。また、教区の調整を通さない一方的なボランティア活動による混雑などにも触れられた。

千厩は礼拝堂・牧師館が危険建物とされたため、借家を確保したことなど、厳しい現状が報告された。

大船渡は高台にあり被害は軽微、支援物資が配布され地域に喜ばれていること、埼玉地区による炊き出しなどの支援活動が行われたことが報告された。

また、人的な被害（行方不明）が出た内丸教会や教会員の被害のことが覚えられた。

東北教区は、高橋和人議長により、29教会の被害状況が一覧表で説明され、大きな被害を受けた教会が多いことが示された。原発事故の被害を受けた地域、教会についても、表とは別に説明された。人的な被害では、判明している4教会4名のことが報告された。また、震災直後の初動から、現時点に至る教区の取り組みが子細に報告された。教区総会への提案内容として、「教区活動を縮小・凍結して総力を挙げてこれにあたる」と、基本姿勢が記されており、教区の被害の甚大さと、これに取り組む悲壮感が伝わった。

また、東北教区教会救援復興委員会の設置に関して、その目的に「被災地域の教会、および教区全体がみ言葉による再生、復興の拠点となること」と記されていることが印象的だった。

関東教区では、22教会・団体の被災状況が上げられ、疋田國磨呂議長より、詳しく説明された。マスコミで取り上げられ、ある程度被害実態の想像がつく沿岸部のみならず、茨城・群馬などの内陸部の被害が大きいことを知らされた。

また被災支援委員会の立ち上げや、これまでの活動内容についても説明がなされた。

大船渡教会で埼玉地区が主体となり「無料バザー」を開催したことが、焼き肉、焼きそば、フランクフルトと、品目まで紹介された。寒い土地で心まで寒くなっている人に、暖かい思いを届けたということだ。

他の諸教区は、限られた報告時間の中で、これまでどのように取り組みを行ったか、また、今後どのような姿勢で臨もうとしているかを述べた。その思い、覚悟が伝わった。被災教会の励ましとなるだろう。

Title:sinpou4722・23.ec7 Page:2 Date: 2013/05/28 Tue 14:46:31

地震、津波、放射能、被災教会を訪ねて

み言葉と祈りを届けて2千キロ

地域復興のために働く教会

主に用いられるならば

前号に記したように、4月4～8日（月～金）、東海教区小出望議長、宮本義弘伝道委員長（教団宣教研究所委員長）による東日本大震災被災教会訪問に、教団新報も同行した。

当時、東京ではガソリン事情はほぼ回復していた。だから出発できたのだが、被災地、特に福島県内では未だ深刻な不足状態にあった。出発前日、福島在住の知人に様子を尋ねると、朝3時に起きて3時間並び、やっと20リットル入れて貰えるとのこと。車社会の福島では、ガソリンなしには通勤もままならず、日常生活が困難になる。この時点で被災から20日以上、このような過酷な状況が続いていた。「福島県内では給油しないで」とまで言われた。

宮本師が運転するハイブリッド車でも、この点が不安だった。満タンで出発したのは勿論、非常用に20ℓ缶を積んでいたが、現地での給油に全く支障はなく、20ℓ缶も先々の教会で不要とされ、結局持ち帰った。1日で状況が変化すると聞いた通りだ。しかし、一方では、缶を幾つも積み込む車を見かけた。場所によるのだ。また、コンビニにはおにぎりが見当たらない。陳列棚の半分以上が空の所もあった。

4泊5日を過ごすために、自分自身の身の回り品が多く、ために救援物資を積む余地はあまりない。被災地に空手で出掛けることに、正直躊躇を覚えた。フットワークの点では非能率でも、宿は4泊とも被災地から遠く離れた所に取った。現地の物資を消費したくない思いからだ。

現地で消費することが経済復興に繋がるという考え方もあるが、それは時間的にもう少し先のことだ。次元が違う。朝夕の食事は宿で十分取れたが、昼は菓子パンなどで過ごし、一度は、宮本師持参の山歩き用器具で湯を沸かし、カップラーメンをいただいた。

空手と記したが、この訪問の目的は、奥羽・東北両教区に献金を届け、一つでも多くの被災教会を訪ね、共に祈ることにある。おこがましい言い方をすれば、み言葉と祈りとを持参したのだ。

計18教会を訪ね、どこでも、小出議長が決まって詩編116編を朗読し祈った。祈りは旅程に差し障りが出る程に長くなってしまう。勿論、その前に、被災時の様子などを聞く、1時間以上も、堰を切ったように話が止まない人が多い。思いが一杯に詰まっているのだ。本当なら一晩中でも話し足りないのだろう。

通俗的な表現だが、御言葉と祈りとを持参したつもりが、持参したよりも多くのものをいただいて帰路につくこととなった。

以下に、前号からの諸教会訪問の続きを記す。

石巻山城町教会で、鈴木師夫妻（右）、関川氏（その左）

礼拝堂・牧師館倒壊の危険がある千厩教会を訪ねたところ、その建物内に柳沼（やぎぬま）赦羊子（さよこ）教師と2人の子どもの姿。裏山に亀裂が入り牧師館は近隣に移転、当然、付設の学習塾も出来ない。退避勧告が出され、礼拝は信徒宅で守っているとの報告は後日聞いた。津波が襲った地からは遠く離れている内陸部の被害も大きい。

3日目、宮城県に入り、陸前古川教会に寄る。03年の宮城県北部地震による被災と会堂再建については、新報で何度か取材した。この度の被害は比較的軽微だが、元々地盤の弱い土地らしく液状化の兆候が見られ、余震続く中で今後に楽観は出来ない。

再び三陸海岸に接近。床下浸水した石巻栄光教会は、被災直後から、ボランティアセンター、援助物資の基地として大いに用いられた。公的避難所の欠けを補うことが出来たことなど、小鮒實教師から詳しく聞いた。直ぐ隣の公的避難所では手足を伸ばすことさえ困難、学校に比べたらはるかに小さな教会が、何人かの高齢の方に、手足を伸ばして休む場所を提供できた。このことに特別象徴的な意味があるように思わされた。小さく無力に見える教会も、主に用いていただければ、大きなご用を果たすことが出来る。

石巻山城町教会は、牧師の交代期にあった。鈴木淳一・裵善姫（ペーンヒ）教師夫妻は、出先で地震に遭遇、教会へと帰り道を急いだが、道が瓦礫や出水で塞がれ、辿り着くことができなかった。数日の避難所生活を経て接近できる場所を探し、腰まで海水に浸かりながら、漸く帰還したと聞く。

後任の東京神学大学新卒の関川祐一郎氏着任後も、イースターまでは留まり、一緒に働くと言う。（…石巻の両教会については、前号1面参照）。

後述の磐城教会も、4月から上竹裕子教師が赴任した。他にも同様の例や、赴任出来ず待機という例がある。牧師交替期である3月に起きた異変だから、不思議には当たらないが、赴任教師も大変な苦労を負うことになる。

ここに詳細を記すことは憚られるが、被災した教師の中には、教会の行く末を考えると不安に脅える人もある。誰もこの教師を責めることは出来ない。むしろ、皆でこの重荷を担うことをしなくてはならない。

話は遡るが、前号に記した鹿島栄光教会の佐々木茂教師は、訪問した時に、田舎の小さい教会の灯火を守る仕事は、最後のご奉公として老牧師がなすべきという説を披瀝した。地方の小規模教会こそ、牧会に経験が要求される、また、年金が付き老後の最低の保障がある人がふさわしいとし、机の上の学びも続けなければならない若い人に、過重な労苦を押し付けるのは、悪い制度・慣習だと言い切った。一つの見解だと思う。

宮城野愛泉教会（國津信一・里咲教師）は、被害は殆どない。被災直後、近隣に大規模な一時避難所が設けられたが、やがて満員状態となり、あぶれて帰宅難民となった人々への炊き出しを行い、一時休憩所となった次第を聞いた。

寝室は大広間と聞き心が痛む。折角避難所から逃れられたのに。それでもこの人々にとって、束の間の休息の時なのだろう。

部屋を替わって上げたいと思う。もっとも、当方は布団3組で畳が見えなくなる小部屋だが。

どの宿でも、長期滞在者があると聞いた。お金さえあればハワイにだって住めると言うつぶやきも聞いた。異常な生活が長引き、被災者同士の心にも亀裂が入るのを恐れる。

被災教会支援では、全教団一つ思いで、なすべきことを果たしたいものだ。

煙突をもぎ取られた福島新町教会

市民に愛された美しい会堂が

4日目、福島教会。訪ねた時、既に礼拝堂は更地になっていた。市の文化財に指定される程の、美しい煉瓦作りで、蔦の教会として市民にも愛されていたが、倒壊の危険に、いかんともしがたし。

堀江知己教師は、赴任2年目、厳密には震災時は1年目。絵心のある師が、ほぼ書き上げていたという旧会堂の絵を見せて貰う。写真と見まごうばかり、そして、写真よりも色合いが美しい。100年愛された会堂は、教会員の思い出と、この絵の中に生きることになる。

3日目に訪ねた岩沼教会も、歴史を感じさせ風格のある石造りの会堂壁面が崩落の危機、特に、塔の部分が見るからに危険だ。敷地の奥には付属幼稚園があり、園児もこの側を通って行く。早急な手当が必要となっていた。

キリスト教が浸透し切れていないと思われがちな東北の地には、実は、100年の歴史を刻む教会が少なくない。必ずしも大人数の礼拝ではなくとも、孤島の灯台のように、その役割を果たしてきた。地震のためにその働きを絶えさせてはならないと痛感する。

信夫教会を訪ね塚本一正師と祈りを合わせる。福島市内は地震以上に、放射能への不安が、町を支配していると聞く。別の情報では、県境には自衛隊が駐屯し、脱出しようとする者を押し留めているというデマが、一時、中学生の間に流れたそうだ。事実無根だが、これが流布する程の不安があったことは事実なのだ。

福島新町教会については、前号に記した。

福島市内を出、宿に入って間もなく、場所によって震度6強を記録した激しい余震。心配になり、翌日福島新町教会の瀧山勝子教師に電話すると、亀裂が一層大きくなったとのこと。

5日目、牧師館が居住不能となった郡山教会を経て、磐越自動車道を通り、いわきに向かう。数日後、余震による山崩れが、この道路を塞ぐ様子をテレビ画面で見ることになるとは。

磐城教会は、隣接の幼稚園が、学校法人化されたものの、教会と一体の働きをしている。震災に当たっても、上竹師の前任地藤沢教会やその近隣教会などから送られて来た救援物資を、幼稚園の車と人手で、物資不足勝ちな沿岸部の病院や避難所に送っている。私たちの訪問時にも、ホーリネス教団のワゴン車が、物資とボランティアを載せて到着した。

福島及びいわき市内の教会については、前号に関連記事掲載。訪問後、いわき地方には、震度6強級の余震が2度起こった。

最後の訪問地、郡山教会から福島純雄教師が転任したばかりの筑波学園教会を訪ね、帰路についた。

この他にも、塩釜東教会、仙台東一番丁教会などを訪ねたが、目立った被害はない。

この日の朝、コース変更が最早不可能になってから、栃木県内の諸教会、またアジア学院の被害が大きいことを知った。茨城県、千葉県等関東の諸教会被害状況は、後日お伝えしたい。

さて、初日、盛岡近郊に宿を取った。古びた宿は、20代の青年で満員。津波被災地で働く労働者だと聞く。沿岸部までは山道を車で2時間は走ることになる。朝は5時起き、往復だけで4時間以上。仕事とは言え、頭が下がる。

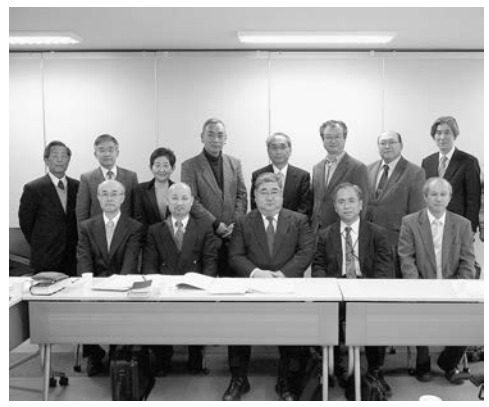
3泊目の宿は、仙台市内から遠く離れた遠刈田温泉（とおがったと読むが、遠かったに由来するとも言う）の更に山奥のホテル。「南三陸町御一行様」と一緒になる。但し、一行は食事も風呂も別扱い。そして、

Title:sinpou4722・23.ec7 Page:3 Date: 2013/05/28 Tue 14:46:59

「宣教」と「伝道」の違いは何か

第1回宣教委員会

第37総会期第1回宣教委員会が3月7日（月）～8日（火）、教団会議室において開催された。出席者は、張田眞、加藤幹夫、田中かおる、白戸清、望月修、具志堅篤、福井博文、米倉美佐男（伝道）、岸憲秀（教育）、釜土達雄（社会）、大三島義孝（担当幹事）、野村和正（担当幹事）。陪席者は、成松三千子（全国教会婦人会連合）、古屋博規（全国教会幼稚園連絡会）、草深茂雄（担当職員）。欠席者は石井錦一（日本キリスト教保育所同盟）。



後列左から、野村（幹事）、望月、成松、古屋、福井、釜土、岸、大三島（幹事）
前列左から、白戸、米倉、張田委員長、具志堅書記、加藤

先ず、招集者の張田委員が使徒言行録16章6～10節を朗読、開会祈祷を捧げた。委員の自己紹介の後、互選により張田委員が委員長、書記に具志堅委員が選出された。

それから、今期委員会の在り方についての協議がなされた。その中で「宣教」と「伝道」の違いは何か、その定義についてのホットな議論が展開された。その後、前期委員会からの「申し送り事項」については協議がなされた。前期委員会からの「申し送り事項」は、左記の6項目である。①社会事同、キ保同との連携強化。②「障がい」を考える小委員会、靖国・天皇制問題小委員会の継続。③牧師とその家族のメンタルケアの必要とセクションの明確化。④「青年伝道」担当幹事の必要性。⑤幼稚園、保育園問題との関係。⑥宣教方策会議の開催。

「牧師とその家族のメンタルケアの必要性」については本来、教師委員会が扱う事柄ではとの声も上がったが、将来的にはそのようになることを希望しつつ、今期は宣教委員会のもとで取り組むことが承認された。「障がいを考える小委員会」の委員長には加藤委員が選任された。

宣教方策会議は来年3月開催を目指し準備を進める。1970年代から「宣教」が様々な社会問題を担うことと理解されてきた。これまでの在り方に評価と反省を加え、教会本来の「宣教」の在り方を求め、常議員会、伝道方策検討委員会、宣教研究所との連携を密にして開催する方向性を確認した。

釜土委員の閉会祈祷で会を閉じた。次回委員会は6月30日～7月1日の予定。（具志堅篤報）

「ふさわしくない」との思いを超えて

第1回教師検定委員会

第37総会期における第1回教師検定委員会が、3月24日（木）～25日（金）、教団会議室で行われた。12日前、東日本大震災が発生し、当初は日程変更が取り沙汰されたが、検定試験準備のスケジュールを考慮し、予定通り行われたもの。結果的に支障はなかった。

委員7名のうち6名の出席。

開会に際し、招集者・東野尚志委員はIコリント1・26～31を朗読し、教師検定任務を委ねられる者誰もが感じる「ふさわしくない」との思いに対し、それを超えて、教会の歴史における神の不思議な選びの出来事の中に、神の知恵が働いていることを信じるよう奨め、新委員会が主の御前で絶えず畏れと謙虚をもって誠実に働くことができるように祈り願った。

各委員の自己紹介の後、内藤留幸総幹事から挨拶があり、この度の大震災に対する教団としての対応状況を説明するとともに、この事態の中で常設委員会の働きが不断になされることの大切さを理解し、忠実に任務を果たすよう激励した。

後列左から、鷹澤匠、若月健悟、八木浩史、野村和正（幹事）、中川（職員）
前列左から、小峰擁、東野委員長、渡部書記

教規・教師検定規則等に基づいて委員会任務を確認した後、委員会組織を行い、互選により委員長に東野委員、書記に渡部和使委員がそれぞれ選任された。

委員長・事務局報告を承認後、前期委員会からの申し送り事項を検討。「教師検定ガイダンス」が作成された経緯等を確認した。第37総会期教師検定委員会方針を協議し、基本的に前委員会を受け継ぐ形で決定した。また、委員会日程・2011年秋季教師検定試験日程確認、提出課題の決定、学科試験問題作成担当者の決定、受験要綱作成、等を行った。

教師検定規則第4条改正による試験は2012年春に実施され、当委員会がはじめて担当することになる。これまでの経緯、現状報告、今後の見通しに関する丁寧な説明が委員長および事務局よりなされ、質疑がなされた。関係神学校・神学部との連携、シラバス読み替えなど、求められる作業はより複雑となるが、教師を立てるために必要と考え、日本基督教団が決定したことである。主の豊かな祝福と導きの中で責任を果たしていけるよう祈って閉会した。（渡部和使報）

格差是正と伝道推進を

第1回教区活動連帯金検討委員会

新たに選出された第37総会期第1回委員会を以下のように行った。2月28日（月）場所、教団会議室。委員会構成、岡本知之（委員長、教団副議長）伊藤瑞男、岡田義信、鈴木功男、高橋和人（書記）、計良祐時（担当幹事）。

後列左から、鈴木、岡田、計良（幹事）
前列左から、高橋書記、岡本委員長、伊藤

まず、前委員会の短期的な課題であった、拠出留保していた教区が留保を解くことが報告された。

次に、今委員会の位置づけと性格について全体的な協議を行った。

今委員会の任務は前期委員会の議論を受け教区活動連帯金について、現制度の根幹である全教会拠出による、格差是正と伝道推進を生かして新たな制度設計を行なうことである。

そのためには時間をかけて綿密な制度を立てる必要がある。現行の教区活動連帯金配分委員会からは独立しているが意見を聞くことができる。

この委員会の主な課題として以下のことが協議された。

①地域による格差の実態の掌握、現在の算定基礎数の検証と教会にとって実際的な算定基礎数の検討。

②伝道推進と協力の主旨をどのように生かすことができるか。どのような使途が想定されるか。

③教団の制度の中に組み入れられることと教区間直接支援制度の可能性の検討。

④各教区が独自に形成してきた伝道支援体制とのかかわり。

⑤収入と配分について、負担金化すべきか、配分方法はどのようになされるべきか。申請による配分か計算による配分かなどの検討。

⑥将来を見越した会計の全体的規模の検討。

⑦名称の検討。名称が一人歩きしないよう適正な名称の検討。

次回委員会を4月4日とし、第3回委員会を6月27日とした。（高橋和人報）

「伝道する体制を整えること」を基本とし

第1回伝道方策検討委員会

3月28日（月）～29日（火）、教団A会議室にて、第37総会期第1回伝道方策検討委員会が開催された。

冒頭、大震災被災地に向かう直前にもかかわらず、石橋秀雄総会議長の陪席を得た。委員一同、議長の伝道と本委員会に対する熱い思いを受けとめた。本委員会の委員構成、第1回常議員会における本委員会設置に関する協議が十分であったか等をめぐり、しばらく懇談した後、議長は被災地に出発し、委員会組織に入った。委員長の選任をめぐっては、候補として挙がった者について不都合が無いかどうか、長時間議論した。委員一人一人が本委員会に関する意見を述べた後、北紀吉委員を委員長に、岡村恒委員を書記に選任した。

さらに、協議の中で、信徒の祈りなくして伝道があり得ないことを覚え、信徒の全国的な祈りの集団を形成していくことの重要性を確認し、鈴木功男委員を副委員長に選任した。

本委員会が協議すべき内容については、「伝道する体制を整えること」を基本とし、以下の諸点を確認した。教団全体に向かって伝道のイメージと、教会の将来像を具体的に示していくこと、キリスト教学校・諸団体との協力関係を具体的に構築していくこと、国内外の諸団体とも協力・提携しつつ「時代の変化」を受けとめた伝道方策の検討と実行、その他。さらに、関係諸委員会とも協力しつつ、短期的方策のみならず、中・長期的方策をも合わせて検討していくこととした。

ただし、今回は伝道実行の予算がないこともあり、具体的な伝道方策の実行に関しては、既に様々な活動を重ねている諸団体に広く呼びかけて協力し、推進していくこととした。

後列左から、張田眞、鈴木副委員長、岡村書記、岡田義信、藤盛勇紀（幹事）、神田（職員）
前列左から、小林克哉、米倉美佐男、岡本知之、北委員長

2日目、小島誠志日本伝道会代表に陪席して貰い、同会の活動について聞いた。

本来、伝道決議を重ねてきた教団が担うべきであった活動を、同会が教団に代わって実施してきた経緯、また、説教者の派遣・キャラバン伝道・修養会の開催等が既になされてきたことを学び、今後、具体的な活動を協力して行うことを確認した。

次回委員会では、教会関係幼稚園・保育園の課題について学ぶと共に、「伝道」の定義とイメージを共有するための協議を行う。（岡村恒報）

Title:sinpou4722・23.ec7 Page:4 Date: 2013/05/28 Tue 14:47:29

統一協会問題でヴァチカン訪問

洗脳や人格破壊の問題で理解を共有

統一協会問題キリスト教連絡会

統一協会問題キリスト教連絡会は2月21日（月）から26日（土）の日程でヴァチカンを訪問し統一協会をはじめカルト諸集団に関する諸問題について情報交換・意見交換を行ってきました。

参加者は全国霊感商法対策弁護士連絡会の紀藤正樹弁護士を含む12名でした。内訳はカトリック中央協議会、日本バプテスト連盟、日本聖公会から各1名、日本基督教団統一原理問題全国連絡会から代表世話人の小出望牧師（36総会期宣教委員長）、岩﨑隆牧師（元宣教委員長、現神奈川教区議長）、吉田好里牧師（連絡会の議長役）をはじめとする8名です。

ローマ・カトリック教会を代表するヴァチカンとの協議実現は4年前からの懸案でしたが、このたび、キリスト教一致推進評議会（局長・ブライアン・ファレルＡｂｉｔｉｎｅ司教他1名）、諸宗教対話評議会（次長・アンドリュー・タンヤーアナン・ヴィサヌ神父他1名）、ヴァチカン市国行政庁長官ジョバンニ・ラヨーロ枢機卿をお訪ねして、それぞれ長時間にわたって協議を行うことができました。

言うまでもないことですが、ヴァチカンは統一協会をキリスト教とは認めておらず、宗教として対話の対象ともしていません。モルモン教やエホバの証人も同様とのことでした。そのことを確認した上で、宗教は人々に幸せを与えるけれども、時として人々に不幸をもたらしているのは残念であり、ことに統一協会をはじめカルト諸集団について心を痛めていること、また、ヨーロッパで問題が大きくなっているシントロジア（サイエントロジー）を含めて、洗脳や人格破壊などの諸問題について、互いに理解を共有し、有益な情報交換・意見交換をなすことがきました。

ヴァチカン側からは、日本における連絡会の取り組みを支持し評価する旨の表明があり、さらに教育、福音宣教の重要性について問題提起がなされ、カルトやセクト問題への対処について協議する世界的な会議の実現を目指しているとの意向が示されました。

また、我々の訪問の1ヶ月前には韓国からも諸宗教のグループが訪れ、統一協会の問題についても話し合われたようです。宗教の本来的なあり方について啓発するための取り組みが求められています。

今回の訪問に際し、日本カトリック協議会の久志利津男神父が労をとってくださり、ヴァチカンの関係諸機関は我々を歓迎してくださって、ローマ教皇謁見にも臨席することができました。また、ヴァチカンで30年に及んで仕事をしておられる和田誠神父が通訳をはじめ、種々の便宜をはかってくださったことでした。感謝にたえません。

（張田眞報）

上：ヴァチカンとの協議実現

下：懸案を果たし晴れやかに

東京信徒会講演会

「宣教基礎理論」

―その問題点と見直しをめぐって―

東京信徒会講演会は2011年3月5日鳥居坂教会を会場に、教職・信徒46名が出席して開かれた。

主題「伝道に燃える教団『宣教基礎理論―その問題点と見直しをめぐって』」に強い関心が寄せられた。

宣教研究所では、前々総会期から「宣教基礎理論」見直しが進められていたが、今総会期第1回常議員会で、伝道議案審議の際に重要課題として浮上。講演会開催の切っ掛けとなった。

講師の宣教研究所宮本義弘委員長は冒頭、マタイ5章13節を引用して次のように問いかけた。「あなたがたは地の塩である」。この御言葉をどのように読むか。主イエスは、「地の塩になれ」と言われたのか。ここに50年前に作成された宣教基本方策と宣教基礎理論を読み解く鍵がある。

キリストの光に照らし出されて輝く者という姿が抜け落ち、自分自身の力で塩の働き、輝きを保ち続けようとするならば、信仰は難行苦行である。そこからの解放が今問われている。

宣教百年の1958年、伝道不振解決のために研究を開始。'61年「宣教基本方策」策定。それに基づく「宣教基礎理論」を'63年に完成。現在に至る。

基本方策に記された骨子「体質改善が必要であることを自覚し、合同教会としての一致と連帯性の強化」が重視された。

教会の体質とは、神の前での人間関係の質と定義され、神と私たちの関係から始まるのではなく、信徒相互の人間関係から始まる。つまり人間の手によって変革できると示唆した。

ここに、十字架によって神と私たちとの関係が、贖い、赦され、神と和解させていただいたという根本的な関係が解消されてしまう危険。更に「教会はこの世との連帯性の中に生きている」とし、教会の礼拝は横の関係を重視して位置付けられる危険性を孕んだ。

こうした教団半世紀を経て、今、新たな教団の歩みを始める第一歩として、宣教基礎理論の見直しに多くの期待が集まっている。

（鈴木功男報）

主イエスは「地の塩になれ」と言われたのか？

ひとときの人

北　優香さん

主が備えてくださった恵み

「牧師の子って嫌じゃない？」と聞かれることがある、と笑いながら話す。優香さんは教会で育ったのみならず、幼稚園・小学校・中学・高校・大学、すべてキリスト教学校へ通い、キリスト教環境に生活のすべてが囲まれていた。それは否定的に受け取られるものでなく、むしろ大きな恵みであったと語る。

神の家族＝教会で、主にある大家族に囲まれ、多くの愛を受け、1歳のときに幼児洗礼、教会の祈りに育てられて中学1年で信仰告白、それらは皆、牧師の子としての恵みだった。そのことへの感謝の思いは、いつしか後に続く世代へこの恵みを伝えたいとの願いへと導かれ、大学ではキリスト教保育を学んだ。

同時に、中学校で出会って以来、優香さんの心を捉えて離さなくなった楽器がハンドベルだった。中学2年の自由研究課題ではハンドベルについて調査、日本ハンドベル連盟主催の講習会には中高の間に3回に亘って参加、大学生になってからは講習会アシスタントのボランティアとして参加した。

大学卒業後の進路について祈り考えるようになった最終学年の冬、ハンドベル販売会社を紹介され、現在はそこで勤務する。キリスト教主義の幼稚園・学校を中心に、ハンドベルの魅力を伝え、普及を図る仕事、それはキリスト教教育への思いと大好きな音楽とが不思議と結びついた職場だった。

近年は韓国の教会青年との交流を通じ、同世代の信仰の友との出会いが、国境を越えて与えられている。北東アジアのクリスチャン青年の交流プログラムである、ｅＡｓｔ21ａｓｉａスタッフも担う。

本人曰く「音楽が大好き」なタラントは、国際交流の場でも存分に発揮されている。プログラムの中で、あるときは参加者たちがハンドベルを囲んで交流を深め、また別の機会には、キリスト教大学のハンドベルクワイアが会に参加する。それらのプログラムを準備し実行する中に、主が備えてくださった恵みを感謝しつつ奉仕する、優香さんの姿があった。

大阪府生まれ、愛宕町教会員。

停電の中の卒業式

私は卒業式の週に大震災のために、被災地の教会を問安して回った。そのために幼稚園を休んだ。卒業式の練習は一回だけ。その日も園長として出ることができなかった。

卒業式の前日、園に出勤した。A君「園長、卒業式忘れんなよ」。私「忘れないよー」。B君「園長、卒業式のやりかた教えてあげるよ」。私「ありがとう」。B君「きおつけして、そして、こっちのお手てでわたして、こっちのお手てで握手、バッテンするんだよ」。B君、真剣に卒業式のやり方を教えてくれた。左手で卒業証書を渡し、右手で握手する。このようにして卒業証書を渡している。

卒業式当日。C君がわたしに向かって叫んだ。「園長、間違えるなよ」。私「分かった。頑張る」。真剣に私のことを心配してくれているのだ。

越谷も地震で大きく揺れ、この卒業式の週は「自由登園」として登園バスを出すことができなかった。144名の内、2日間で登園してきたのは、それぞれ64名、64名という状態だった。

計画停電の中での卒業式となった。大災害の傷みを共に負う中での卒業式までの日々であった。

しかし、怖い思いをし、怖い場面をテレビで見ている。その中で「相手の心思う優しい心」が育っていることを強く感じて感動した。

この「心」が、幼児の中にしっかり育っているというところに大きな希望をもつことが出来た。

（教団議長　石橋秀雄）